

# 植松遺跡第10次調査(UM2006-10)

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告



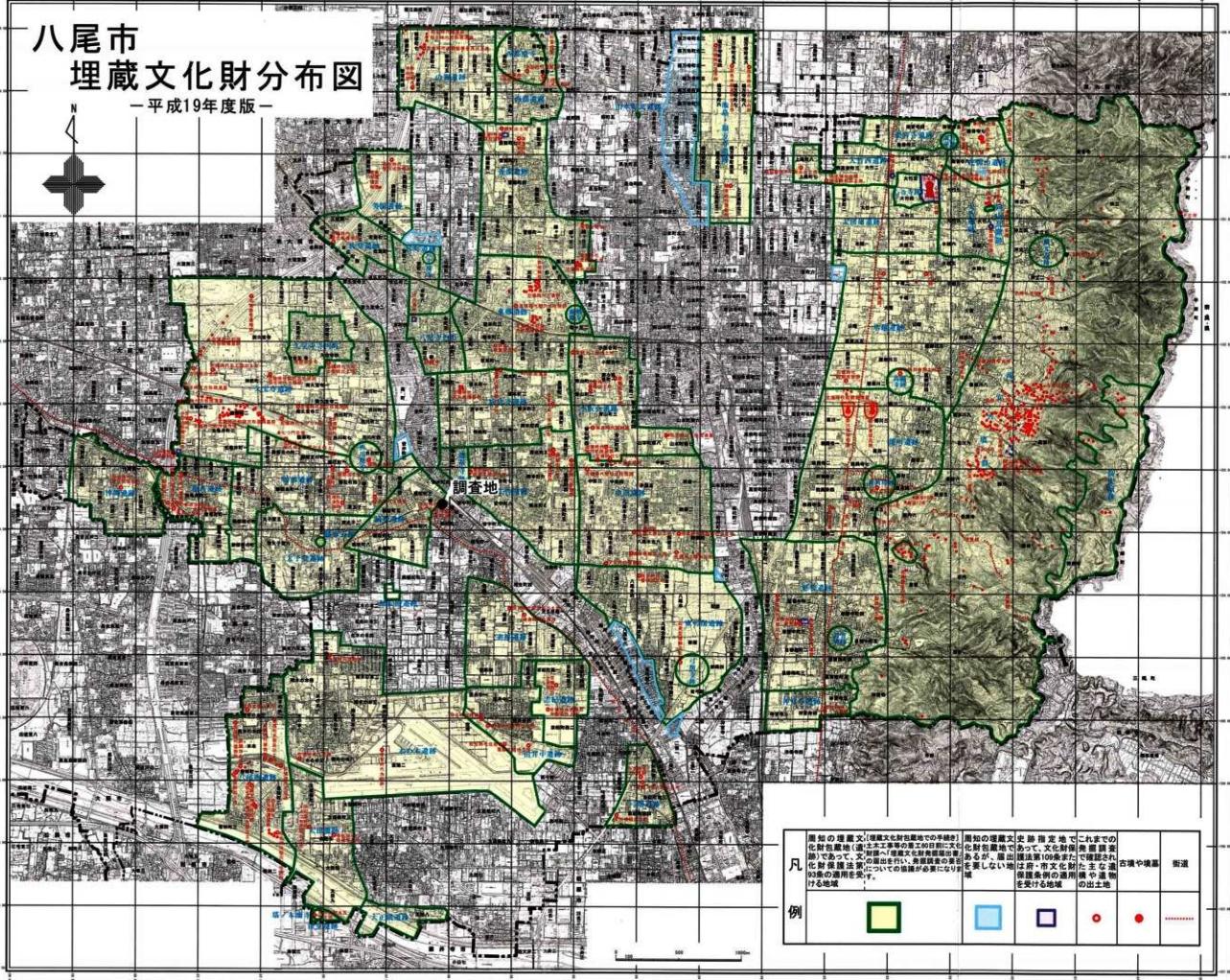
## 植松遺跡第10次調査(UM2006-10)

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

—平成19年度版—



## はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、市域の大部分が古大和川を主とする大小河川の沖積作用によって形成された河内平野に位置しており、古くから人々がこれらの河川と密接にかかわりながら暮らし続けた場所でもあります。古大和川水系の沖積作用は、肥沃な土壌を運ぶとともに、氾濫・洪水などの危険性も合わせ持っており、河川の氾濫と戦ってきた人々の生活や知恵と努力が市域の地中深くに埋もれています。これら先人の知恵と努力を、今に生きる私たちが継承していくのが責務と考えているところであります。

今回報告する植松遺跡第10次調査は(仮称)植田家史料館新築工事に伴うもので、植松遺跡隣接地として発掘調査を実施したもので、近世から近現代にかけての生活の一端を知ることのできる多くの遺構・遺物が見つかりました。さらに、この調査の成果から、植松遺跡の範囲が広がることになりました。このように、ひとつひとつの調査成果の積み重ねから、新たな見解が生れることも、発掘調査の特徴といえましょう。

本書が地域の歴史解明、ならびに埋蔵文化財の保護・普及の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、一連の発掘調査にご協力下さった関係諸機関の皆様に厚くお礼申し上げます。今後とも文化財保護に一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 岩崎健二

## 例 言

- 1 本書は、大阪府八尾市植松町3丁目で行った、(仮称)植田家史料館新築工事に伴う植松遺跡隣接地埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 1 本書で報告する植松遺跡第10次(UM2006-10)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は平成18年12月4日～12月20日(実働10日間)に成海佳子を担当者として実施した。
- 1 調査面積は約110m<sup>2</sup>を測る。
- 1 現地調査・内業整理に参加した調査補助員は、池崎綾乃、芝崎和美、鷹羽佑太、田島宣子、橋本黄士である。
- 1 内業整理は、現地調査終了後隨時行い、平成20年3月に完了した。
- 1 本書作成にあたった調査補助員は、上記のほか、遺物実測－中村百合、拓本－西口佳奈、遺物写真撮影・図版作成－青山 洋・閑野佑城、遺物トレース－市森千恵子である。本文執筆・全体の構成は成海が行った。
- 1 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2500分の1地形図(平成8年7月発行)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成19年度版)を使用した。
- 1 本書で用いた標高の基準は T.P. 値(東京湾標準潮位)である。
- 1 本書で用いた挿図の縮尺は、各挿図内のスケールに示している。
- 1 発掘調査および内業整理の過程で作成した写真・図面等の資料は、一括して財団法人八尾市文化財調査研究会で保管している。広く利用されることを希望する。

## 目 次

### はしがき

### 例言

### 八尾市埋蔵文化財分布図

1 はじめに.....	1
2 調査概要.....	3
1) 調査の方法と経過.....	3
2) 基本層序.....	3
3) 検出遺構と出土遺物.....	4
3まとめ.....	11

### 報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図.....	1
第2図 調査区設定図.....	3
第3図 平断面図.....	7
第4図 遺構断面図.....	9
第5図 出土遺物実測図1(瓦類).....	10
第6図 出土遺物実測図2(土器・陶器類).....	11
第7図 調査地変遷図.....	12

## 表 目 次

第1表 周辺の調査地一覧表.....	2
第2表 近代の遺構一覧表.....	4
第3表 近世の遺構一覧表1(土坑・溝).....	13
第4表 近世の遺構一覧表2(小穴).....	14
第5表 出土遺物一覧表1(瓦類).....	15
第6表 出土遺物一覧表2(土器・陶器類).....	15
第7表 出土遺物一覧表3(磁器等).....	16

## 図 版 目 次

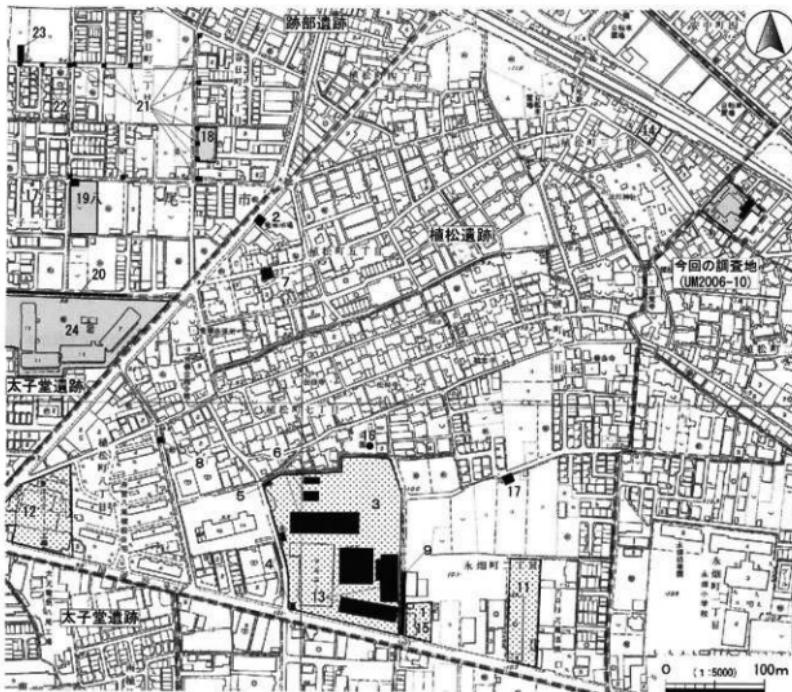
- |     |                |     |                        |
|-----|----------------|-----|------------------------|
| 図版一 | 植田家母屋(東から)     | 図版三 | 3区調査風景(南から)            |
|     | 掘削前の状況(東から)    |     | 3区調査風景(北東から)           |
|     | 1区調査風景(南から)    |     | 3区溝28(北から)             |
|     | 1区調査風景(東から)    |     | 3区土坑20(南東から)           |
|     | 1区全景(南東から)     |     | 3区全景(東から)              |
| 図版二 | 1区土坑5(南西から)    | 図版四 | 3区溝28検出状況(北東から)        |
|     | 1区土坑10(南東から)   |     | 3区溝28完掘(北東から)          |
|     | 2区調査風景(東から)    |     | 3区下層全景(東から)            |
|     | 2区北壁・土坑19(南から) | 図版五 | 土坑5・土坑10・土坑11・土坑19出土遺物 |
|     | 2区全景(東から)      | 図版六 | 土坑20・土坑23、溝15・溝28出土遺物  |

# 植松遺跡第10次調査(UM2006-10)

## 1 はじめに

植松遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川から古平野川が分岐する地点(渋川神社付近)の古平野川の自然堤防上から、南北に広がる沖積地上に位置する。現在の行政区画では、八尾市西部の植松町3～8丁目、永畠町2～3丁目、安中町4丁目の一部がその範囲にあたる。

周辺の遺跡には、南から西へ伸びる古平野川の自然堤防上に太子堂・亀井・竹潤遺跡が連なり、北方の長瀬川左岸から古平野川右岸にかけては跡部・久宝寺遺跡が、南には植松南遺跡・老原・志紀・木の本・田井中遺跡などが長瀬川左岸に位置している。また、長瀬川を挟んだ北東側には、矢作・成法寺遺跡がある。当遺跡は、昭和56(1981)年度に八尾市教育委員会が実施した発掘調査によって、平安時代前期の掘立柱建物や溝などが検出されたことによって周知された(1)。以後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって数件の調査が実施されている。これまでの調査結果から、自然堤防の下部に古墳時代後期～平安時代の河川跡、南部の沖積地上に弥生時代前～中期の居住域・墓域、古墳時代前期の居住域、奈良時代の生産域などが検出されている(第1図・第1表参照)。



第1図 調査地周辺図

第1表 周辺の調査地一覧表

番号	所在地	原因	おもな出土遺構（出土物）	特記事項
1	永瀬町2	店舗	平安・延喜式（土師器・須恵器・黑色土器・土坑・瓦）	都の免柵柵内「横浜南遺跡」と呼称
2	植松町5	公共下水	時期不明・河川・土坑（古墳後期・須恵器）	河川の埋没跡（6世紀前半）と跡部・太子堂遺跡の集落範囲との関連
3	永瀬町3	共同住宅・店舗	時期不明・河川（飛鳥・土師器）	河川の埋没時期（6世紀前半）と太子堂遺跡の集落範囲・住居跡80との関連
4	永瀬町3	公共下水	南北朝～中世：遺物包含層（弥生土器（I・IV・V様式）/古墳前期・古式土器）	弥生時代～後期の遺物包含層を確認
5	永瀬町3	共同住宅（防火水槽）	平安・河川（土師器・須恵器）	古長瀬川と思われる大規模な埋没河川を検出した
6	永瀬町3	共同住宅	沈没層・中期 池（發生上源（一・三式桃）/古墳前期・落込み〔古式土器・須恵器〕/古墳後期～近世：土坑・溝〔土師器・須恵器・堅壁土器・瓦等〕）	弥生時代前期～古墳時代前期の遺構を検出
7	植松町3-5	公共下水道	陶器・中型・土坑・溝（弥生土器（瓦様式・石垣丁・築石）/奈良時代：溝〔中世：溝・土師器・須恵器〕）	跡部・太子堂遺跡の弥生中期・奈良の集落が連續する
8	植松町7	公共下水	河町本町式以前：河川〔土師器〕	河川の深さは17m以上を測る
9	永瀬町3	共同住宅（防火通路）	平安前期：第（土師器・須恵器・土馬）	土馬の出土は、当時の精神文化の一端を知る上で貴重な資料と言える。
10	永瀬町2	公共下水道	奈良：土坑（土師器・須恵器・瓦）/鍾乳：溝	3・4次調査で検出した弥生時代～中世の地層・奈良一體化時代の生活面が更に広がった。
11	永瀬町2	分譲住宅（防火水槽）	平安～鍾乳：溝〔瓦器〕	平安～鎌倉の生産域が確認でき植松南80との関連で見た
12	植松町8	店舗	中世以前：河川／中～近世：溝〔土師器・陶器類・瓦〕	中世以前は全域が河川、河川埋没後生産域に
13	永瀬町3	共同住宅	奈良後平～平安前期：所作城・生産域（土師器・須恵器・黒色土器）/平安後平～難波：生産域（瓦器・瓦）/近世：井戸・水溜め〔閏井防潮器・瓦〕	奈良時代後半以降生産域から移住へと初期間に変移し、平安時代後半以降生産域に
14	植松町3	兼用住宅	時期不明（土塁・覆没以下）：河川	近年までの河川堆積を確認
15	植松町2	店舗	奈良後平～平安前後：遺構〔土師器〕	「植松南」・13.8（次調査）との関連
16	植松町7	防火水槽	奈良：土坑（土師器・須恵器）	奈良時代の遺構の広がりを確認

※番号は第1回・文教共通

## 参考文献

- 高木光真 1983「第2章 植松南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告2号(2) (財)八尾市文化財調査研究会
- 吉田野乃 1992「4. 植松遺跡（90-433）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告26 八尾市教育委員会
- 酒 章 1993「5. 植松遺跡（91-626,627）の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告27 平成4年度団体補助事業 同上
- 高萩千秋 1993「XVI 植松遺跡第1次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告39 (財)八尾市文化財調査研究会
- 高萩千秋 1994「II 植松遺跡第2次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告42 同上
- 高萩千秋 1997「I 植松遺跡第3次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告59 同上
- 岡田清一 1999「I 植松遺跡第4次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告63 同上
- 西村公助 1998「III 植松遺跡第5次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告60 同上
- 原田昌訓 1998「IV 植松遺跡第6次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告60 同上
- 高萩千秋 2000「IV 植松遺跡第7次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告65 同上
- 西村公助 2003「I. 植松遺跡（2002-35）の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48 平成14年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 成海佳子 2003「2. 植松遺跡（2002-259）の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48 平成14年度国庫補助事業 同上
- 岡出清一 2004「12. 植松遺跡（2003-145）の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告49 平成15年度国庫補助事業 同上
- 岡田清一 2003「4. 植松遺跡第8次調査（UM 2002-8）」「平成14年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 樋口 留 2006「2 - 1. 植松遺跡（2005-25）の調査」『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告53 平成17年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 西村公助 2007「I 植松遺跡第9次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告99 (財)八尾市文化財調査研究会
- 西村公助 1997「I 跡部遺跡第10次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告88 同上
- 坪田真一 1994「2. 跡部遺跡第12次調査（AT 93-12）」「平成5年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」
- 坪田真一 1994「3. 跡部遺跡第13次調査（AT 93-13）」同上
- 高萩千秋 1996「III 跡部遺跡第21次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告83 同上
- 坪田真一 1999「I 跡部遺跡第25次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告62 同上
- 坪田真一 1999「III 跡部遺跡第27次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告82 同上
- 岡田清一 2003「I 跡部遺跡第33次調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告76 同上
- 岡田清一 1993「I 第1次調査（TS 83-1）発掘調査概要報告」[太子堂遺跡（第1次調査・第2次調査報告）]八尾市文化財調査研究会報告36 同上

調査地である植松3丁目に所在する植田家は、宝永元(1704)年の大和川付け替え後、柏原市玉手山の安福寺によって開墾された「安中新田」の支配人として今に続く家柄で、現存する母屋の家相図には、文政5(1822)年のものが残されている。母屋は「板称植田家史料館」として八尾市に寄贈されることになり、植松遺跡隣接地であった当地が調査対象となったものである。

調査後、植松遺跡の範囲が植田家の屋敷地を取り込んで広がることとなり、当敷地は「安中新田会所跡」として史跡指定地となった。

調査地は母屋の東側にあたり、近年までの生活の場となっていた「はなれ」の一部および北側の土蔵を取り壊した跡である。なお、土蔵は解体され、敷地内の東側へ移築されている。

## 2 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

調査区が狭いため、地区割りは行わなかったが、図面作成については土蔵移築時の工事用の任意座標を利用した。この座標軸は、敷地建物に則したもので、北から東へ約41度振っている。高さの基準は、西側道路交差点上のマンホール(T.P.+12.020m)から移動した。

残土処理の都合から調査区は3分割し、北から1～3区と呼んで順次調査を実施した。調査終了後も順次埋め戻しを行った。また、2・3区間は配水管等が横断していたため、一部に掘削していない部分がある。

掘削に際しては、原則として、0.3m前後までの表土などを機械掘削とし、以下遺構ベースまで手掘りとし、遺構掘削、遺物採取をおこなった。最終的に、河川埋土である最終ベースまでを機械・人力併用で掘削し、下層の堆積状況を確認した。地形測量・写真撮影・平断面図作成などの記録作業は、隨時行った。

### 2) 基本層序

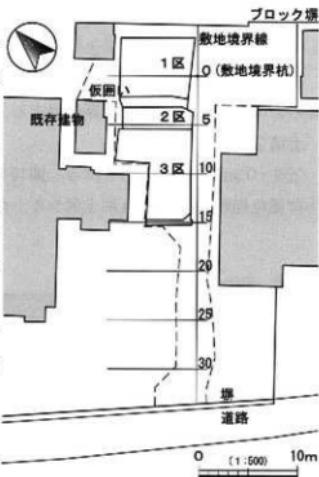
調査地上面の標高は12m前後で、北東から南西へわずかに高くなっている。基本的にI～V層までの5層を確認した。

I層：茶褐色砂質シルト・壁土・漆喰・炭等を多量に含む。厚さは0.1～0.3m。調査時の表土であるが、既存建物建築・解体に伴うものかもしれない。土蔵より北東側では、土蔵改修に伴うコンクリートや木片・ビニール・プラスティック等が混ざる。

II層：黄褐色粗粒砂にオリーブ灰色・青灰色粘土質シルトのブロックが混入する。厚さ0～0.5m。遺構内埋土や草木の根の可能性もある。

III層：茶褐色砂質シルトに黄褐色極細粒砂のブロックが混入する。厚さ0.1～0.3m。近代の土坑1～3はこの層から構築されている。

IV層：褐色砂質シルト～粗粒砂。厚さ0.3～0.5m。最



第2図 調査区設定図

終的な遺構面である。上面の標高は11.5~11.8mで南が高い。

V層：黄白色粗砂～礫。古大和川の主流の一つである旧長瀬川の自然堤防で、付け替え以降の堆積土である。厚さは0.3m前後までを確認した。ここから、平安時代末期の土師器羽釜片が出土している。

このうち、近代の遺構はⅢ層から構築されており、遺構埋土は概ね黄褐色粗粒砂を主体としている。近世の遺構はⅣ層上面から構築されており、主な遺構埋土は茶褐色粘土質シルト・砂質シルト・極細粒砂・粗粒砂・礫などからなり、灰オリーブ～灰褐色粘土質シルトのブロックの混じるものが多い。

また、1区北東壁(土蔵部分)ではⅣ層上面で土蔵建築に伴う整地が見られる。1区南西壁・南東壁では、土蔵の巻石がⅣ層を切り込んで構築されていることが確認できた。巻石の直下には、白灰色礫と茶褐色極細粒砂の薄い互層が0.2m程度の厚さで数枚見られ、土蔵ベースの版築の可能性がある。

### 3) 検出遺構と出土遺物

近世・近代の遺構・遺物を多数検出した。うちわけは、近代の土坑3基(1~3)・小穴2個(64・65)のほか、近世の土坑23基(4~5・7~13・15~27)・小穴36個(6・29~63)、溝2条(15・28)である。以下に主要な遺構・遺物を記述し、詳細は第2~6表に委ねる。

#### 【近代の遺構】

1区では土坑2基(土坑1・2)、2区では土坑1基(土坑3)、3区では小穴2個(小穴64・65)を検出した。3基の土坑は北西-南東に長い長方形を呈し、主軸方向はおおむね現在の建物に沿っている。いずれも直線的に掘り込まれ、底は平坦である。

#### 土坑1

2.1×1.1m・深さ0.9mを測る。土坑8・9・12・13を切る。埋土は1-①茶褐色礫混砂質シルト、1-②黄褐色粗粒砂に茶褐色礫混砂質シルトのブロック、1-③黄褐色粗粒砂に灰褐色粘土質シルトのブロック、④黄褐色粗粒砂に茶褐色粘土質シルトのブロックからなり、炭を含む。近世の軒棟瓦のほか煉瓦・釘等が出土している。

#### 土坑2

0.55×0.3m・深さ0.5mを測る。溝15を切る。埋土は2-①黄褐色粗粒砂混粘土質シルト、2-②黄褐色粗粒砂に灰褐色粘土質シルトのブロックで、漆喰が付着した石や壁土が出土している。

第2表 近代の遺構一覧表

遺構名	形状					位置(m)	埋土	備考	遺物
	平面	断面	北西-南東	北東-南西	深さ				
土坑1	方形	方形	2.1	1.1	0.9	① 茶褐色礫混砂質シルト(炭少)	土坑8・9・12・13を切る。 焼瓦 煉瓦 釘	溝15を切る。 壁土 磯瑟	漆喰付石 壁土 磯瑟
						② 黄褐色粗粒砂に茶褐色礫混砂質シルトのブロック			
						③ 茶褐色粗粒砂に灰褐色粘土質シルトのブロック			
						④ 黄褐色粗粒砂に茶褐色粘土質シルトのブロック			
土坑2	隅丸方形	方形	0.55	0.3	0.5	① 黄褐色粗粒砂混粘土質シルト(漆喰・壁土)	溝15を切る。 壁土	漆喰付石 壁土	不明小片
						② 黄褐色粗粒砂に灰褐色粘土質シルトのブロック			
土坑3	溝丸方形	蓬台形	3以上	1.3	0.6	① 茶褐色礫混砂質シルト・黄褐色粗粒砂のブロック(炭・瓦等多量)	土坑17~19を切る。	磯瑟	磯瑟
						② 灰褐色粗粒砂のブロック			
小穴64	円-後円形	U字形	種	0.15~0.02	0.1	① 灰オリーブ粘土質シルト			
小穴65	方形	U字形	一延	0.2	0.1	② 灰オリーブ粘土質シルト			

### 土坑3

長辺3m以上・短辺の1.3m・深さは0.6m、底は平坦である。近世の土坑17～19・20・22・23を切る。埋土は焼土・瓦片を多量に含む茶褐色疊混砂質シルト～黄褐色粗粒砂のブロックである。内部からは近世の磁器筒型碗・碗・小型碗の他、瓦・貝殻・鉄釘等が出土している。

### 【近世の遺構】

1区では土坑11基(土坑4～14)、溝1条(溝15)を検出した。2区では土坑4基(土坑16～19)、3区では土坑8基(土坑20～27)、溝1条(溝28)、小穴33個(小穴29～63)を検出した。土坑・溝の軸は、いずれも近代の遺構同様、現在の建物方向とはほぼ同じ北西～南東・北東～南西である。

土坑は狭い範囲に23基が接近して構築されている。平面の形状には、方形(土坑14・16・18～20・22・24・25)、円形(土坑10・21・23・26・27)、楕円形(土坑5～9・11～13)、不定形(土坑4・17)がある。断面の形状には、逆台形(土坑5～9・11・14・16・17・22・24)、二段掘りの逆凸字形(土坑4・10・19・23・25)、半円形(土坑12・13・18・20・21・26・27)がある。おもな埋土は茶褐色粘土質シルト～砂質シルト～極細粒砂～疊のブロックからなるが、炭・焼土・瓦片を含む茶褐色疊混砂質シルトが堆積する(土坑10・13・16・20)、粘土質シルトのブロックが混入する(土坑4・5・8・23)、粗粒砂主体の(土坑17・19)などがある。

### 土坑4

1.75×1.2m以上の規模の不定形で、深さは0.5mを測る。上段底に火を受けた石が3個置かれていた。埋土は上段に①炭を含む茶褐色粘土質シルト・極細粒砂・疊のブロック、下段には②茶褐色粘土質シルト・極細粒砂・疊と灰オリーブ色粘土質シルト・褐色粘土質シルトのブロック、③灰オリーブ色極細粒砂である。①から軒桟瓦(1)のほか、陶磁器類の小片や火を受けた瓦下粘土等が出土している。軒桟瓦1は軒丸瓦のないタイプで、中心飾りが橘の橘唐草文である。

### 土坑5

長径3.5m・短径2.1m以上・深さ0.5mを測る。逆台形の断面を持ち、底は平坦である。埋土は①茶褐色粘土質シルト・極細粒砂・疊と灰オリーブ色粘土質シルト・褐色粘土質シルトのブロック、②炭・焼土を含む茶褐色粘土質シルト・極細粒砂・疊と灰オリーブ色粘土質シルト・褐色粘土質シルトのブロック、③炭を多量に含む茶褐色粘土質シルト～極細粒砂・灰オリーブ色粘土質シルトの薄い互層、④黄褐色疊、⑤炭を含む黄褐色粗粒砂である。④層上面は、焼き締まったように硬い。①～③から軒丸瓦・平瓦・磁器碗(28・29)・磁器皿(30)・磁器大皿(31)等が出土している。碗28・29はやや大ぶりの広東碗で、見込みに「寿」の銘がある。皿30は「くらわんか手」の碗に伴うもので、蛇の目凹形高台である。大皿31には蛸唐草文が施される。吳須の發色もよく、「焼締」の跡が見られることから、高級品と考えられる。

### 土坑8

長径1.8m以上・短径1.35m・深さ0.6mを測る。土坑1・7に切られ、土坑11・9と接している。埋土は①茶褐色疊混砂質シルト、②茶褐色疊混砂質シルトに灰オリーブ色粘土質シルトのブロック、③黄褐色粗粒砂・茶褐色砂質シルトの互層である。①・②から、軒丸瓦(3・4)、丸瓦(5)、陶器擂鉢(16)、陶器小碗(17)、陶器燈明皿(18)、磁器小皿(32)や瓦下粘土等が、③から平安時代の土師器羽釜の小片が出土している。軒丸瓦の瓦頭文様は三巴文で、3が右巻、4が左巻である。珠文は3が大きく密、4は小さく粗く配される。丸瓦5はやや小振りの丸瓦であ

る。擂鉢16はいわゆる備前系または堺系の擂鉢である。燈明皿18は受付皿で、陶器小碗(坏)17とともに瀬戸・美濃系または京都・信楽系で、ともに神仏具の可能性がある。

#### 土坑10

南西は調査区外に至るが、径1.8m程度・深さ0.5mを測る。埋土は10-①炭・焼土・瓦片を含む茶褐色礫混砂質シルト、10-②焼けた壁土・瓦下粘土を多量に含む茶褐色粘土質シルト混榎細粒砂～粗粒砂、10-③茶褐色粗粒砂混砂質シルト、10-④焼土である。③から磁器碗(33)や丸瓦等が出土している。碗33は見込みの圓線内に五弁花・高台裏に銘を持つ肥前系の「くらわんか手」である。

#### 土坑11

長径2.1m・短径1.6m・深さ0.5mを測る。南隅に径0.3m・深さ0.1m程度のピット状の窪みが張り出して取り付いている。土坑1・8に切られ、土坑12と接している。埋土は11-①茶褐色粗粒砂混砂質シルトに灰オリーブ色粘土質シルトのブロックで、軒丸瓦(2)、磁器碗(34)、キセル(35)等が出土している。軒丸瓦2の瓦当文様は不明瞭であるが、右巻き巴文の可能性がある。珠文は小さく密である。碗34の見込みには蛇の目剥ぎが見られる。キセル35はその形態から、18世紀後半頃に比定できる。

#### 土坑16

一辺1m四方・深さ0.7m程度を検出した。急角度に掘込まれており、湧水があったため完掘はしていない。埋土は16-①焼土・瓦片を多量に含む茶褐色粗粒砂混砂質シルト、16-②茶褐色礫混砂質シルト、16-③茶褐色砂質シルトと黄褐色粗粒砂の互層、16-④茶褐色砂質シルトと黄褐色粗粒砂の互層からなる。①から瓦、陶磁器片等が出土している。最下は湧水層であるV層(基盤層)に達していることから、井戸の可能性がある。

#### 土坑17

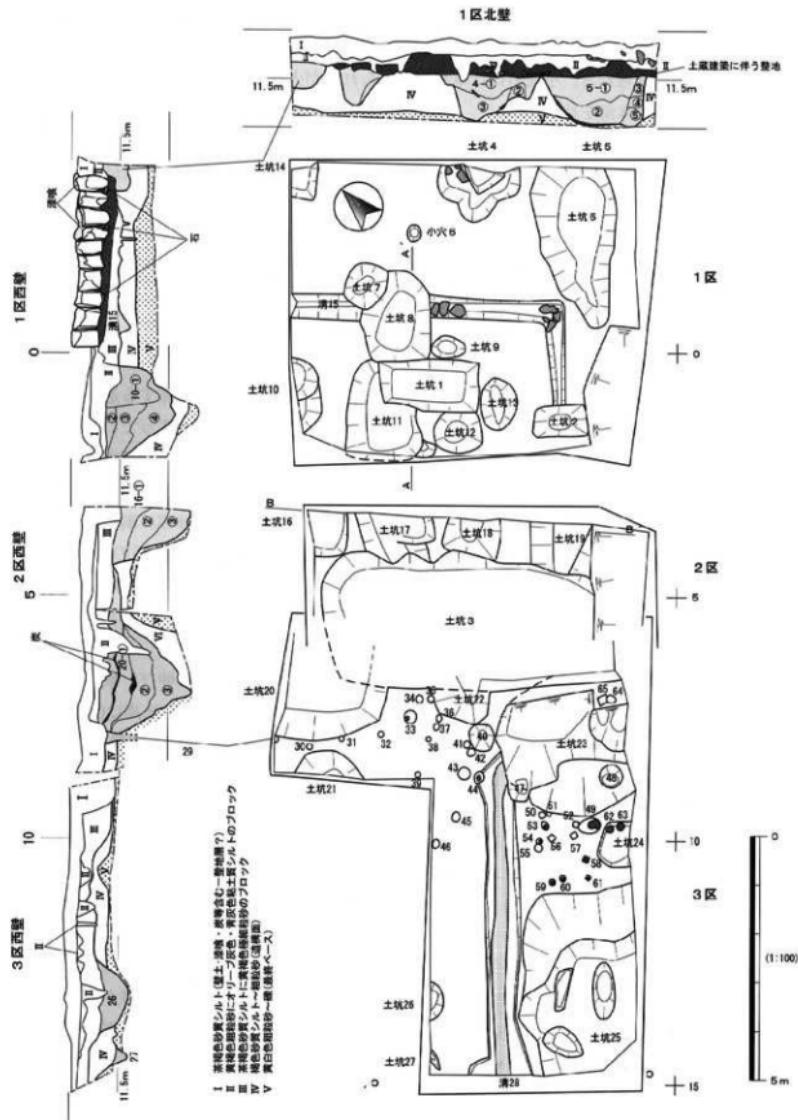
1.5×1.2m以上の不定形、深さ0.15mと浅い。土坑3に切られる。埋土は17-①黄褐色粗粒砂に灰褐色粘土質シルトのブロック、17-②炭の混じる黄褐色粗粒砂からなり、溝の可能性が考えられるが、1区である北東側へは延長しない。内部から陶器燈明皿(19)の他、陶磁器や平瓦等が出土している。燈明皿19は皿中央に筒型の突起を持つもので、「蠟燭形」に分類される秉燭である。

#### 土坑19

1.3×1.1m以上の不定形、深さ0.45mで南側に段を持つ。土坑3に切られる。埋土は19-①茶褐色砂質シルトと黄褐色極細粒砂のブロック、19-②炭の混じる黄褐色粗粒砂からなり、溝の可能性があるが、土坑17同様北東へは延長しない。内部から陶器花瓶(御神酒徳利-20)・磁器小碗(36)・磁器大皿(37)や瓦等が出土している。御神酒徳利20は信楽塗原C窯に類例が見られる神仏具である。小碗36は端反碗で、赤・金で網状の模様・文字を描いている。大皿37も色絵で、飾り皿であろう。火を受けている。

#### 土坑20

一辺2.3m以上・深さ1m近くの規模をもつ。周囲に小穴29～34が取り巻いている。埋土は20-①炭・瓦下粘土を多量に含む茶褐色粘土質シルト・粗粒砂のブロック、20-②茶褐色粘土質シルトに灰オリーブ色粘土質シルトのブロック、20-③黄褐色粗粒砂と灰褐色粘土質シルトのブロックで、最下はV層に達しており、土坑16同様井戸の可能性がある。周囲の小穴から、上屋などの構造物があった可能性が高い。①から陶器瓶(21)、磁器碗(38～40)、磁器小皿(41)、油壺(42・



第3図 平断面図(水平1/100・垂直1/50)

43)や多量の瓦下粘土が出土している。瓶21は外面に鉄釉が施されるもので、備前・丹波のものであろうか。碗38は広東碗、碗39は青磁碗で口縁内面には四方樺文が廻る。碗40の外面には菊花のコンニャク判が見られる。小皿41には草花文が見られるが火を受けている。油壺42・43は、ともに小振りで球形の体部を持つ。

### 土坑23

径3m前後、深さ0.5mを測る。南～西側にテラス状の段を持ち、ここに小穴48が構築されており、西側に溝28が取り付いている。埋土は23-①灰オリーブ色粘土質シルト・茶褐色砂質シルトのブロックで、底は平坦であるが、東側で再び落込む部分が見られる。内部から磁器皿(44)が出土している。皿44は内面に二重網目文が施され、見込みには蛇の目釉剥ぎが見られる。

### 溝15

幅0.3～0.5m・深さ0.2m・検出長7.7mを測る。土坑2・7・8に切られる。埋土は茶褐色粘土質～砂質シルト・粗粒砂のブロックで、炭を少量含む。1区中央部を北西～南東へ伸びた後、南西へ直角に折れる。移築された土蔵の直下で検出されたため、土蔵建築に関係する遺構と考えられる。土坑8との交点南東側および屈曲点に漆喰の付着した焼石が数個まとまっていたほか、軒棟瓦(15)、ミニチュア擂鉢(22)、磁器碗(45～51)等が出土している。軒棟瓦15は軒丸瓦の部分が取り付くもので、丸瓦部分の瓦頭文様は左三巴文である。擂鉢22はままごと道具であろう。碗45・46は広東碗で、ともに見込みに文様が描かれる。碗47は外面・内面口縁部に網目文、見込みに「寿」が描かれる。碗48の外面には花唐草文が施されている。碗49～51は肥前系のいわゆる「くらわんか手」で、50・51の見込みには印判(コンニャク判)の五弁花があり、51には蛇の目釉剥ぎが見られる。

### 溝28

幅0.6～1.2m・深さ0.5m、検出長6.1mを測る。3区中央部を南西～北東に伸び、東へ屈曲して土坑23に至る。下段の深さは南西端では0.2m、北東端では0.5mを測り、底の比高は0.3m南西が高く北東が低いことから、土坑23への排水溝と考えられる。溝の構造は、外側(掘形)と内側に分かれ、その上部は28-①茶褐色粘土質シルトで埋められている。内側の断面の形状は二段掘りで、下段の壁際には主に平瓦が2～3段立て並べられ、その内側は28-②暗褐色粗砂混シルト質粘土と夥しい量の瓦や日常雑器である陶磁器類と粗砂～礫で充填されている。外側(掘形)の埋土は28-③茶褐色極細粒砂に灰色粘土質シルトのブロック、28-④黄褐色粘土質シルトシルトと黄灰色粗粒砂の互層で、③からは人為的な埋立てがなされたことがわかり、④からは流水のあった可能性が窺える。出土遺物には、軒平瓦(6・7)、軒丸瓦(8～12)、瓦質土管(13・14)、陶器燈明皿(23～25)、陶器擂鉢(26)、土器鉢(27)、磁器碗(52)、磁器油壺(53)等がある。軒丸瓦12は谷用の軒丸瓦である。土管13・14は、形態からは室町時代中期にまで遡り得る可能性がある。燈明皿25は受付皿で、受部の切り欠きの特徴から京都・信楽の製品と考えられる。擂鉢26は備前(堺)系、鉢27は上げ底を持つもので、火鉢・火消壺・風炉等であろう。碗52は見込みに38同様「昆虫」状の文様があり、火を受けている。油壺53は小型で球形の体部が遺存する。

### 小穴

3区で検出した小穴29～61は、平面形状・規模・埋土などから大別できる。平面形状は円～椭円形・方形の2種、規模は径0.3mを境に大小2種、埋土からは①茶褐色粘土質シルトと粗粒砂

のブロックを主とするもの、②灰褐色粘土質シルトと砾のブロックを主とするもの、③灰褐・灰オリーブ色粘土質シルトと砾のブロックからなるものの3種である。

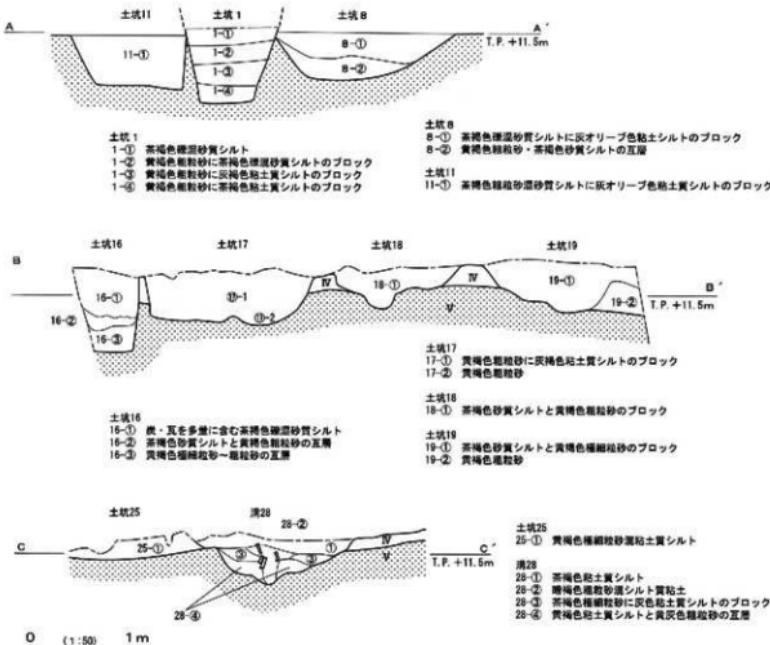
おおむね小型で円形の(小穴29~39・41~46・50~53・55)の埋土は①、小型で方形の(小穴54・56~61)の埋土は②、大型で円形の(小穴40・47~49)の埋土はいずれも③からなる。検出位置からは、土坑20を取り巻くグループ1(小穴29~35)、土坑22から南西へ併行して伸びるグループ2(小穴36~46)、土坑23周辺のグループ3(小穴40・47~49)、土坑23・25間にまとまっているグループ4(小穴50~51)に大別でき、先の平面形状・規模・埋土をこれに加えると、グループ1・2は小型円形埋土①、グループ3は大型円形埋土③、グループ4は小型方形埋土②が主となっていることがわかる。

註 巴文は、瓦当面に向かって巴の頭から尾が右回り・時計回りのものを右巻・右巴文とし、逆のものを左巻・左巴文とした。出土遺物については、以下を参考にした。

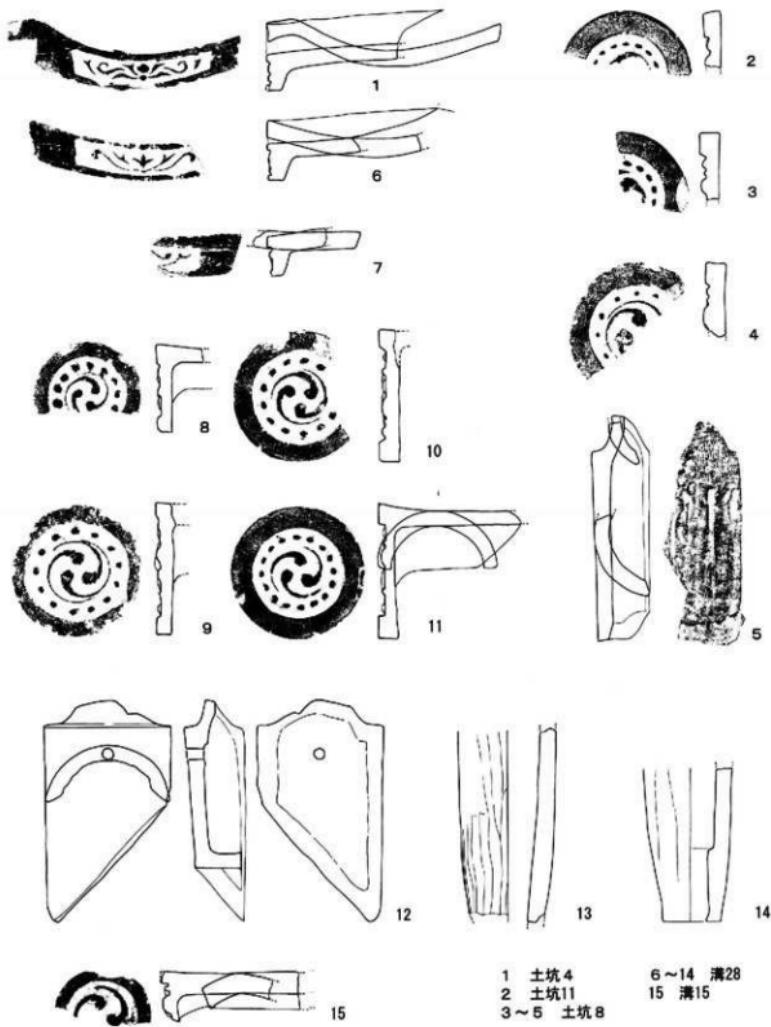
・瓦瓶：法隆寺昭和資料帳編集委員会 1992「法隆寺の至寶 第15巻 - 昭和資料帳 -」小学館

・陶磁器：九州近世陶磁学会 2000「九州陶磁の発展 - 九州近世陶磁学会10周年記念 -」

・陶磁器・その他：江戸遺跡研究会 2001「国説 江戸考古学研究辞典」柏書房



第4図 遺構断面図



1 土坑4  
2 土坑11  
3~5 土坑8  
6~14 满28  
15 满15

0 10 20cm  
(1:5)

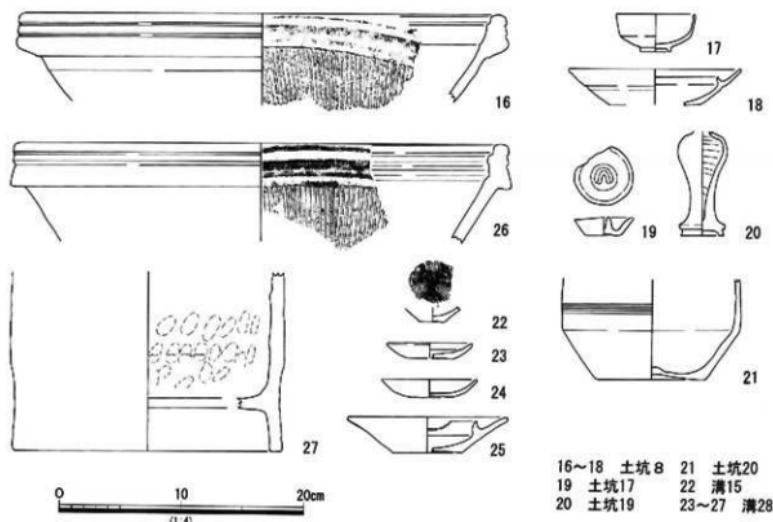
第5図 出土遺物実測図1(瓦類)

### 3まとめ

今回の調査では、近世～近代の多数の遺構を検出した。また、瓦を主とする多量の遺物も出土した。調査中、市教育委員会から家相図の提供を受けた。家相図は8枚あり、古い順に①文政5(1822)年～母屋のみ・②江戸末期(1850)年頃・③明治5(1872)年頃・④明治中期(1890)年頃・⑤大正8(1919)年頃以前・⑥昭和10(1925)年頃まで・⑦昭和35年(1960)年・⑧昭和50(1975)年頃である。第7図は、そのうち画期的見られた図を重ねて作成したものである。家相図によると、母屋・井戸の位置はさほど変わっていないが、調査区の位置には、1区に土蔵が②～⑧まで、2区に②で土壙が横断していた他は、⑤の時点までは空閑地であった。なれば⑥の時点で建てられ、それ以降改築を繰り返し、⑧の時点では調査区の位置が大きく改変を受けていることがわかる。

近代の検出遺構からみると、土坑1・2は、④以降に見られる土蔵下屋の範囲に収まっている。土坑3の位置は、②で土壙、⑧で洗濯室、調査時点にあった集水枠とも重なっていることから、土坑3はこれらの解体・建設等に関わる遺構の可能性がある。以上のことから、近代の遺構の構築時期は、土坑1・2が④以降の土蔵下屋に伴うものであれば1890年頃(明治5年頃以降明治中期以前)までの、土坑3が⑧の洗濯室に伴うものであれば1960年頃(昭和35年頃以降昭和50年頃以前)といえる。

一方、近世の遺構については、溝15の南側への屈曲部は、②の時点1850年頃(江戸時代末期)の米土蔵の東側端部に一致していることから、土蔵の基礎や地鎮等に関連する遺構の可能性があり、構築時期の下限を示している。また、溝28は、南側への延長線上に②時点から⑧時点まで機能していた井戸があることから、これから取水・排水路である可能性が考えられる。



第6図 出土遺物実測図2(土器・陶磁器類)

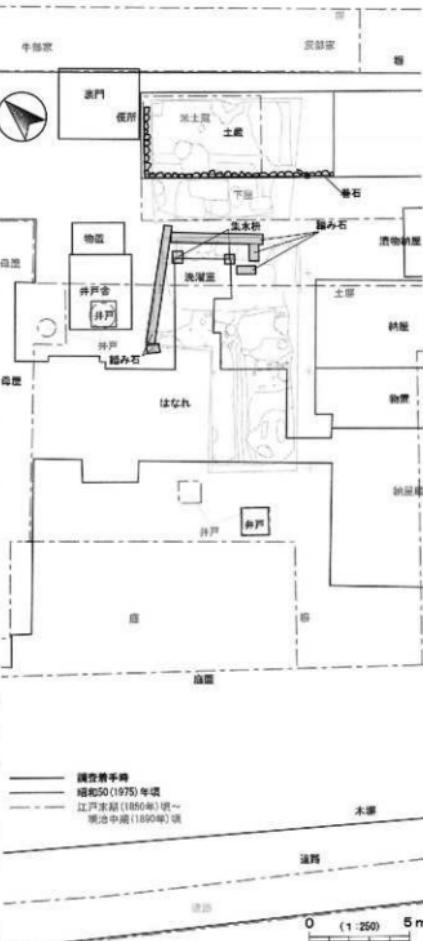
遺物から見れば、瓦類は、軒樋瓦や谷用軒丸瓦などの出土から、いずれも江戸時代後期(18世紀後半)以降に比定できるが、瓦質土管13・14は鎌倉時代前期～室町時代中期にまで遡る類例があり、注意を要する。

肥前系の碗については、V-1期(1680～1740)に雪持籠・二重網目文様が出現し、V-2期(1750～1770)に印判手(菊花・五弁花)が出現し、V-3期(1780～1810)になると多様化する。また、この時期に広東碗も出現する。油壺もV期以降球形の体部になることから、今回の出土遺物はおおむね18世紀後半以降のものと考えられる。

土坑19出土の燈明皿(受付皿)は18世紀後葉以降出現するもので、新しくなるにつれ受けが低くなることから、本資料は19世紀に下る可能性もある。また、受部の切り込みの形状から、京都・信楽産と考えられる。同じく土坑19出土の花瓶(御神酒徳利20)は信楽塗原C窯出土資料に類例があり、燈明皿とともに18世紀中頃以降、京都・信楽で生産された雑器が近隣に供給されていたようである。

土坑5から出土した大皿31に見られる焼継ぎは、18世紀末以降一般に普及したものとされており、伴出遺物からも18世紀後半～19世紀頃の時期が与えられる。土坑11から出土したキセル35についても、形態からIV期(18世紀後半)の時期が与えられている。

これらのことから、今回検出した遺構は、おおむね18世紀後半以降のもので、現存する最古の敷地全体の家相図②江戸時代末期



第7図 調査地変遷図

(1850)年頃より100年程度遡ることがわかった。また、①に見られる文政5(1822)年の記録のある年号よりもさらに遡りうることが明らかにできた。18世紀後半といえば、宝永元(1704)年の大和川付替えから約半世紀後にあたり、旧河川跡には肥沃な農地が広がり、新田開発・経営も軌道に乗ったことと思われる。また、古平野川の旧堤防上は安定した地域となり、居住域にふさわしい環境が整った頃であろうと考えられる。

第3表 近世の遺構一覧表1 (土坑・溝)

遺構名	形状		法面 (m)			埋土	備考	遺物
	平面	垂面	北西-南東	北東-南西	深さ			
土坑4 不定形	逆凸字形	1.75	1.2以上	0.5 上段 0.2 下段 0.3		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫のブロック(灰少量) (2) 茶褐色粘土質シルト～縫と灰オーリー色粘土質シルト・ 褐色粘土質シルトのブロック (3) 灰オーリー色粘土質砂	上段底に施石	軽瓦丸1 陶器器 瓦下粘土
土坑5 長円形	逆台形	2.1以上	3.5	0.5		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫と灰オーリー色粘土質シルト・ 褐色粘土質シルトのブロック (2) 茶褐色粘土質シルト～縫と灰オーリー色粘土質シルト・ 褐色粘土質シルトのブロック(灰・灰少) (3) 茶褐色粘土質シルト・褐色粘土質シルトの互層 (4) 灰褐色粘土質砂(灰多量) (5) 茶褐色粘土質砂(灰少量)		相前28-31 新平瓦 平瓦
小穴6 扇円形	逆台形	0.35	0.3	0.2		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫と粗粒砂～粗粒砂		
土坑7 棒円形	逆台形	1	0.8	0.3		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫と粗粒砂～粗粒砂 (2) 茶褐色粘土質シルト～縫と灰オーリー色粘土質シルトのブ ロック	土坑8 8に 切られる、 溝15を切る	土器器 陶器 瓦
土坑8 棒円形	逆台形	1.35	1.8以上	0.6		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫と灰オーリー色粘土質シルトのブ ロック (2) 茶褐色粘土質シルトと茶褐色粘土質シルトの互層 (3) 黄褐色粗粒砂・茶褐色粘土質シルトの互層	土坑8-18に 切られる、 溝14を切る	軒丸瓦3-4 丸瓦5 陶器16-18 相前32
土坑9 棒円形	逆台形	0.7	0.45	0.45		(1) 系続した粘土質シルト層と粗粒砂～粗粒砂(灰少量)		石
土坑10 半円形	逆凸字形	0.65以上	1.8	0.7 上段 0.3 下段 0.2		(1) 茶褐色粗粒砂シルト (2) 茶褐色粗粒砂・茶褐色粘土質シルトの互層(灰土・瓦下粘土) (3) 茶褐色粗粒砂(灰少量等量) (4) 黑褐色粗粒砂と茶褐色粘土質シルト(灰土等量?)		相前33 丸瓦
土坑11 柄円形	逆台形	1.6	2.1	0.5		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫と粗粒砂(灰少量)	土坑1-8に切 られる、雨落 に小穴7あり	軒丸瓦2 相前34 半セル35
土坑12 棒円形	半円形	1	0.8	0.1		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫のブロック	土坑1に切ら れる	陶器
土坑13 角円形	半円形	0.8	1.1	0.55		(1) 茶褐色粘土質シルト		
土坑14 方形	逆台形	0.5以上	0.75	0.25		(1) 系続した粘土質シルトと茶褐色粗粒砂の互層		
土坑15 方形	逆台形	1以上	0.8以上	0.7以上		(1) 茶褐色粗粒砂シルト(灰・瓦等多量) (2) 茶褐色粗粒砂シルトと茶褐色粗粒砂の互層 (3) 茶褐色粗粒砂シルトの互層	井戸?	陶器 磁器 瓦
土坑17 不定形	逆台形	1.5	1.2以上	0.15		(1) 茶褐色粗粒砂シルトと茶褐色粘土質シルトのブロック (2) 茶褐色粗粒砂(灰少量)	土坑3に切ら れる	軒丸瓦10 相前器 平瓦
土坑18 方形?	半円形	1.2	0.9以上	0.05		(1) 茶褐色粘土質シルトと茶褐色粗粒砂のブロック(灰少量)	土坑3に切ら れる	陶器
土坑19 方形?	逆台形	1.3	1.1以上	0.45 上段 0.15 下段 0.3		(1) 茶褐色粘土質シルトと茶褐色粗粒砂のブロック (2) 茶褐色粗粒砂(灰少量)	土坑3に切ら れる	陶器 磁器 瓦
土坑20 方形	半円形	2.3以上	2.3以上	0.95		(1) 茶褐色粘土質シルト・粗粒砂のブロック(灰・瓦下粘土) (2) 茶褐色粘土質シルトに灰オーリー色粘土質シルトのブ ロック (3) 茶褐色粗粒砂と茶褐色粗粒砂シルトのブロック	土坑3に切ら れる	陶器 磁器 瓦下粘土
土坑21 円形	半円形	0.8	0.3以上	0.3		(1) 茶褐色粗粒砂シルトと茶褐色粗粒砂の互層 (2) 黑褐色粗粒砂(灰少量)		
土坑22 方形?	逆台形	1.1	0.7以上	0.3		(1) 茶褐色粘土質シルト・粗粒砂のブロック	土坑3に切ら れる	
土坑23 円形	逆凸字形? ?	3	0.5 上段 0.1 下段 0.4			(1) 灰オーリー色粘土質シルト・茶褐色粘土質シルトのブ ロック	土坑3・小穴 47-48-62-63 に切られる	軒丸瓦44 瓦
土坑24 方形?	逆台形	0.95	0.65	0.2		(1) 茶褐色粘土質シルト・粗粒砂のブロック		陶器 瓦 糠甙
土坑25 方形	逆凸字形?	2.5以上	4以上	0.4 上段 0.1 下段 0.3		(2) 茶褐色粗粒砂と茶褐色粘土質シルト		陶器 磁器 土器?
土坑26 円形	半円形	0.3以上	0.85	0.3		(1) 茶褐色粘土質シルト～縫粗粒砂～粗粒砂		
土坑27 不定形	半円形	0.5	0.2以上	0.15		(2) 茶褐色粘土質シルトの互層		
遺構名	形状		法面 (m)			埋土	備考	遺物
	平面	垂面	突出長	幅	深さ			
溝15 半円形	北西-南東 北京-南西	55 22	0.3-0.5	0.2		(1) 茶褐色砂質シルト～～粗粒砂	土坑7-8に 切られる	相前15 相前22 相前44-51
溝28 逆凸字形	北西-南東	61	0.6-1.2		0.4-0.7 上段 0.2 下段 0.5	(1) 茶褐色粘土質シルト (2) 茶褐色粗粒砂と茶褐色粘土質シルトのブロック (3) 茶褐色粗粒砂シルトと茶褐色粘土質シルト (4) 茶褐色粗粒砂と茶褐色粘土質シルトの互層		軒丸瓦6-7 灰瓦8-12 瓦下土器13-14 瓦123-26 土器器27 相前52-53

第4表 近世の遺構一覧表2（小穴）

遺構名	形状		法量 (m)	埋土	遺物	柱痕
	平面図	径				
小穴29	円～楕円形	0.15	0.15	① 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック	陶瓦	
小穴30	円～楕円形	0.12	0.22	② 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴31	円～楕円形	0.12	0.21	③ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴32	円～楕円形	0.12	0.2	④ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴33	円～楕円形	0.25	0.25	⑤ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック ⑥ 灰褐色粘土質シルト（柱底）		有り
小穴34	円～楕円形	0.15	0.17	⑦ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴35	円～楕円形	0.12	0.08	⑧ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴36	円～楕円形	0.15	0.12	⑨ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴37	円～楕円形	0.1	0.2	⑩ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴38	円～楕円形	0.12	0.21	⑪ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴39	円～楕円形	0.12	0.15	⑫ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴40	円～楕円形	0.5	0.21	⑬ 灰褐色粘土質シルト・灰オリーブ色粘土質シルト・茶褐色繊維のブロック		
小穴41	円～楕円形	0.15	0.15	⑭ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック	瓦	
小穴42	円～楕円形	0.2	0.3	⑮ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック	灰瓦器？・陶器・瓦	
小穴43	円～楕円形	0.25	0.3	⑯ 紫褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック ⑰ 灰褐色粘土質シルト（柱底）	瓦	有り
小穴44	円～楕円形	0.2 ~ 0.25	0.35	⑱ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック ⑲ 灰褐色粘土質シルト	常滑器？・磁器	有り
小穴45	円～楕円形	0.15 ~ 0.2	0.15	⑳ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック	不明小片	
小穴46	円～楕円形	0.15 ~ 0.2	0.25	㉑ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック ㉒ 灰褐色粘土質シルト（柱底）		
小穴47	円～楕円形	0.4	0.55	㉓ 灰褐色粘土質シルト・灰オリーブ色粘土質シルト・茶褐色繊維のブロック	鉄片	
小穴48	円～楕円形	0.45	0.2	㉔ 灰褐色粘土質シルト・灰オリーブ色粘土質シルト・茶褐色繊維のブロック	土器器・磁器・瓦	
小穴49	円～楕円形	0.3 ~ 0.45	0.15	㉕ 灰褐色粘土質シルト・茶褐色繊維のブロック		有り
小穴50	円～楕円形	0.15	0.2	㉖ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴51	円～楕円形	0.1	0.15	㉗ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴52	方形	0.12 × 0.12	0.2	㉘ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴53	円～楕円形	0.1 ~ 0.2	0.35	㉙ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック	土器器	有り
小穴54	円～楕円形	0.1	0.2	㉚ 茶～茶褐色粘土質シルト・黄褐色繊維のブロック	不明小片	有り
小穴55	円～楕円形	0.15 ~ 0.2	0.15	㉛ 茶褐色砂質シルト・粗粒砂のブロック	陶器 瓦、瓦。	
小穴56	方形容	0.12 × 0.12	0.2	㉜ 茶～茶褐色粘土質シルト・黄褐色繊維のブロック	不明小片	
小穴57	方形	0.12	0.15	㉝ 茶～茶褐色粘土質シルト・黄褐色繊維のブロック	土器器・陶器 磁器皿	
小穴58	方形	0.15 × 0.15	0.25	㉞ 茶～茶褐色粘土質シルト・黄褐色繊維のブロック	瓦、すり鉢等	有り
小穴59	円～楕円形	0.1	0.08	㉟ 茶～茶褐色粘土質シルト・黄褐色繊維のブロック	瓦器上部	有り
小穴60	円～楕円形	0.1	0.25	㉟ 茶～茶褐色粘土質シルト・黄褐色繊維のブロック	磁器器	有り
小穴61	方形容	0.1 × 0.1	0.25	㉟ 茶～茶褐色粘土質シルト・黄褐色繊維のブロック	磁器皿	
小穴62	円～楕円形	0.14 ~ 0.16	0.15	㉟ 灰褐色粘土質シルト・灰オリーブ色粘土質シルト・茶褐色繊維のブロック		有り
小穴63	円～楕円形	0.16 ~ 0.17	0.16	㉟ 灰褐色粘土質シルト・灰オリーブ色粘土質シルト・茶褐色繊維のブロック		有り

第5表 出土遺物観察表1 (瓦類)

番号	器種	遺構名	法量(cm) () 内は残存値				文様等の特徴
			瓦当径・幅	長さ	外縁幅	外縁高	
1	軒棟瓦	土坑4	23.8	(18.0)	0.5~0.6	0.4	中心筋は橘均整唐草文
2	軒丸瓦	土坑11	13.1	瓦当面のみ	2.3	0.6	右巻き三巴文※珠文は16個? (7個残存)
3	軒丸瓦	土坑8	13.3	瓦当面のみ	2.1	0.7	右巻き三巴文 珠文は15個? (5個残存)
4	軒丸瓦	土坑8	13.8	瓦当面のみ	2.2	0.4	左巻き三巴文 珠文は12個? (5個残存)
5	丸瓦	土坑8	12.1	23.0	—	—	
6	軒半瓦	溝28	(17.0)	(19.0)	0.5~0.6	0.3	中心飾りは三葉均整唐草文
7	軒平瓦	溝28	(8.3)	(6.0)	0.5~1.0	0.5	唐草文
8	軒丸瓦	溝28	13.5	(5.0)	1.9	0.4	左巻き三巴文 珠文は13個 (9個残存)
9	軒丸瓦	溝28	13.3	瓦当面のみ	1.5	0.4	左巻き三巴文 珠文は13個
10	軒丸瓦	溝28	13.5	瓦当面のみ	1.7	0.7	左巻き三巴文 珠文は13個 (11個残存)
11	軒丸瓦	溝28	13.8	(14.4)	2.0~2.3	0.7	左巻き三巴文 珠文は16個
12	軒丸瓦(谷用)	溝28	12.9	8~20.1	—	—	釘穴あり
13	瓦質土管	溝28	径5.9~9.1	(15.7)	—	—	外面: ヘラナデ 内面: 布目
14	瓦質土管	溝28	径7.0~9.8	(19.5)	—	—	外面: ヘラナデ 内面: 布目
15	軒棟瓦	溝15	棟部(丸瓦部)10.0	(14.0)	1.1~1.3	0.6~0.8	棟部(丸瓦部)のみ遺存 左巻き三巴文

※瓦当面に向かって、頭から尾が右回り(時計回り)のものを「右巻き」とした。

第6表 出土遺物観察表2 (土器・陶磁器類)

番号	器種	遺構名	法量(cm)				文様等の特徴
			口径	器高	底径	最大径	
16	陶器擂鉢	土坑8	—	38.4	(7.2)	—	擂目は9本 /3.3cm
17	陶器小碗	土坑8	6.3	3.1	2.4	—	口縁端・高台露胎
18	陶器灯明皿	土坑8	13.8	(29)	—	—	回転糸切り 受けは低い。 外面胎部以下露胎
19	陶器秉燭	土坑17	4.7	1.5	—	—	灯心用の突起はU字形
20	陶器花瓶	土坑19	—	(8.6)	3.4	4.0	内面・高台露胎
21	陶器壺(瓶)	S K20	—	(8.3)	8.7	14.4	内面露胎
22	陶器 ミニ?擂鉢	溝15	—	(12)	2.0	—	擂目は4本 /0.8cm
23	陶器灯明皿	溝28	6.8	1.2	3.9	—	回転糸切り 内面に受け状の段を持つ 外面露胎
24	陶器灯明皿	溝28	7.8	1.4	3.6	—	回転糸切り 外面露胎
25	陶器灯明皿	溝28	13.0	3.9	5.7	—	回転糸切り 受けは低く、半円形の切り込みを持つ 外面露胎
26	陶器擂鉢	溝28	39.0	—	(8.1)	—	擂目は9本 /3.3cm
27	土器火鉢	溝28	—	(14.7)	21.7	—	

第7表 出土遺物観察表3（磁器類）

番号	器種	遺構名	法量(cm)				文様等の特徴
			口径	器高	底径	最大径	
28	磁器広東碗	土坑5	—	(3.8)	6.2	—	外面：波文？ 見込み：團線内に「寿」
29	磁器碗	土坑5	—	(3.0)	5.8	—	外面：菊花文？ 見込み：團線内に「寿」
30	磁器皿	土坑5	—	(2.9)	9.2	—	外面：唐草文 内面：扇文？ 蛇の目凹形高台
31	磁器大皿	土坑5	—	(1.9)	18.1	—	内面体部：蛸唐草文 焼繼ぎの痕跡あり
32	磁器小皿	土坑8	4.8	2.6	3.8	—	外面：寿文 見込み：「寿」
33	磁器碗	土坑10	—	(4.7)	5.1	—	高台裏：崩れた漢「福」鋸か？ 見込み：五弁花（コンニャク印判）
34	磁器碗	土坑11	—	(2.3)	4.2	—	見込み：斜格子文、蛇の目釉剥ぎ
35	キセル	土坑11	長さ3.9	最大径1.0	火皿径1.1	—	
36	磁器小碗(端反り碗)	土坑19	4.7	4.3	3.6	—	外面：網目？ 波？ 雲？ 文字？
37	磁器皿	土坑19	21.3	2.8	13.1	—	外面：松葉文？ 内面：6区画に分け榎木・業等の文様を配置
38	磁器広東碗	土坑20	—	(4.0)	4.9	—	見込み：團線内に昆虫文
39	磁器碗	土坑20	12.4	(5.8)	—	—	外面：青磁釉 内面：口縁部に四方櫛文
40	磁器碗	土坑20	12.0	(4.5)	—	—	外面：菊花文（コンニャク印判）
41	磁器皿	土坑20	10.2	—	2.9	—	外面・高台裏・内面・見込みに文様あり 火を受け不明瞭
42	磁器油壺	土坑20	—	(5.4)	4.5	7.0	外面：草花文 内面：露胎
43	磁器油壺	土坑20	7.0	(5.1)	4.5	—	外面：草花文 内面：露胎
44	磁器皿	土坑23	12.0	3.7	2.0	—	内面：体部に二重網目文 見込み：蛇の目釉剥ぎ
45	磁器碗	溝15	—	(3.3)	4.3	—	見込み：團線内に文様あり
46	磁器碗	溝15	—	(3.0)	4.5	—	見込み：文様あり
47	磁器碗	溝15	11.2	6.0	4.5	—	外面・内面口縁部：網目文 見込み：團線内に「寿」
48	磁器碗	溝15	5.9	(5.2)	—	—	外面：花唐草文
49	磁器碗	溝15	—	(2.0)	4.2	—	外面：草花文 見込み：團線内に文様あり
50	磁器碗	溝15	—	(3.4)	3.8	—	見込み：團線内に五弁花（コンニャク印判）
51	磁器碗	溝15	—	(2.7)	4.0	—	見込み：五弁花（コンニャク印判）、 蛇の目釉剥ぎ
52	磁器碗	溝28	—	(3.9)	4.8	—	見込み：團線内に昆虫文
53	磁器油壺	溝28	—	(4.4)	4.4	—	外面：草花文 内面露胎

# 図 版



植田家母屋(東から)



掘削前の状況(東から)



1区調査風景(南から)



1区調査風景(東から)



1区全景(南東から)



1区土坑5(南西から)



1区土坑10(南東から)



2区調査風景(東から)



2区北壁・土坑19(南から)



2区全景(東から)



3区調査風景(南から)



3区調査風景(北東から)



3区溝28(北から)



3区土坑20(南東から)



3区全景(東から)

図版四



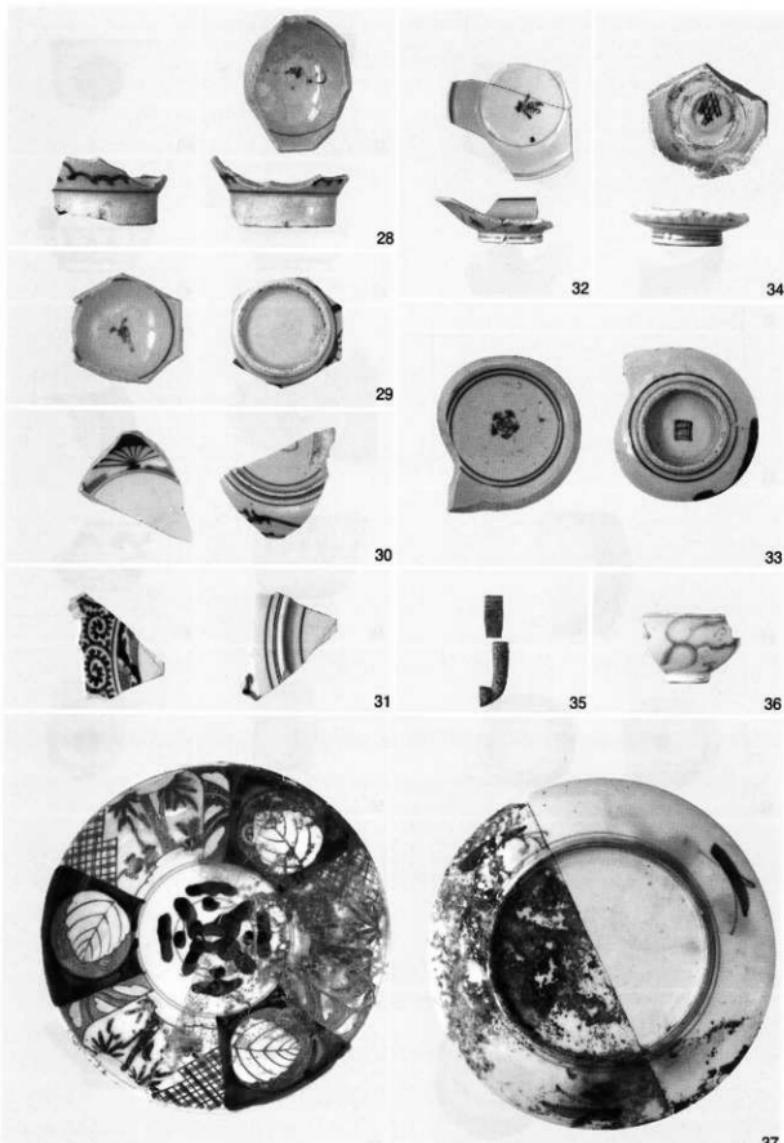
3区溝28検出状況(北東から)



3区溝28完掘(北東から)

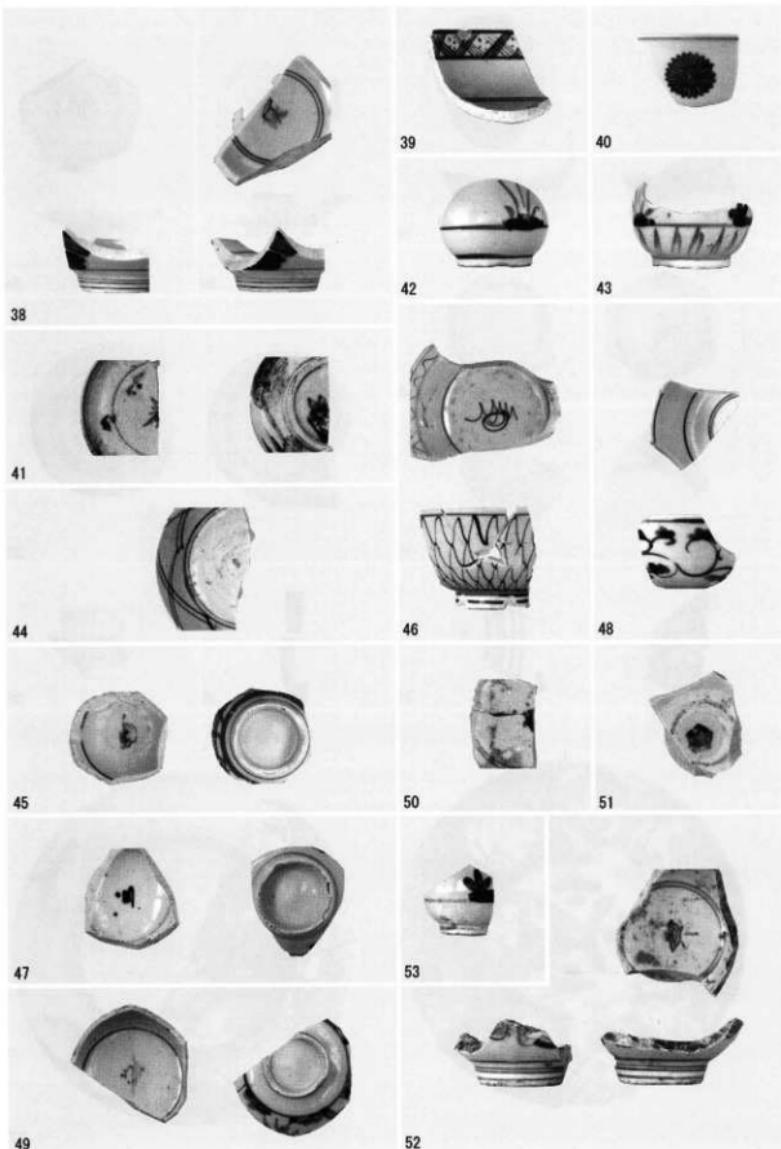


3区下層全景(東から)



土坑5(28~31)、土坑10(33)、土坑11(34·35)、土坑19(36·37)出土遗物

圖版六



土坑20(38~43)、土坑23(44)、溝15(45~51)、溝28(52·53)出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうく
書名	(財)八尾市文化財調査研究会報告113
副書名	植松遺跡第10次調査(UM 2006-10)
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	113
編集者名	成海佳子
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦 2008年3月31日

所 取 遺 跡	所 在 地	コード		北緯	東經	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
		市町村	遺跡番号				
うえまついせき 植松遺跡 第10次調査	大阪府八尾市植松町3丁目	27212	63	34度35分 05秒	135度35分 47秒	20061204 ～ 20061220 約 110	(仮称)植 田家史料 館新工 事

所 取 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植松遺跡	集落	江戸時代	土坑・小穴・溝	屋瓦・陶磁器	
	集落	近代	土坑	屋瓦・煉瓦・陶磁器	
要 約	今回検出した遺構・遺物は18世紀後半のもので、植田家に現存する文政5(1822)年の記録のある最古の家相 岡よりもさらに100年以上遡ることが明らかになった。				

財団法人八尾市文化財調査研究会報告113  
槇松遺跡第10次調査(UM 2006-10)

発行 平成20年3月  
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2  
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 株式会社 近畿印刷センター

